

基本計画の名称：北九州市中心市街地活性化基本計画（小倉地区）

作成主体：福岡県北九州市

計画期間：平成 20 年 7 月から平成 26 年 3 月まで（5 年 9 ヶ月）

1．中心市街地の活性化に関する基本的な方針

[1] 北九州市の概要

(1) 北九州市の沿革

北九州市は、九州の最北端で本州と接する場所に位置し、かつては、四大工業地帯の一つとして日本の近代化を支えてきた都市であり、1963 年（昭和 38 年）に、隣り合う門司、小倉、若松、八幡、戸畑の五市の対等合併を経て政令指定都市として誕生した。

旧五市は、国際貿易や後背地の筑豊炭田の積み出し基地として港湾整備を推進し、官営製鐵所をはじめとする臨海部への重化学工業の展開とあいまって鉄道網が発展した経緯を持つ。

また、少ない平地に山地が複雑に入り組んだ地勢に加えて、豊前国・筑前国の異なる歴史的形成過程を持つなど、それぞれの地域で、現在も独自の文化・生活面での結びつきが見られる。

このような経緯から、北九州市の都市構造は、単独の地区を核とした構造ではなく、旧五市の鉄道駅を中心に市街地が発展し、それらが鉄道沿いに細長く連坦して都市軸が形成された特異なものとなっている。

その後、山陽新幹線、都市高速道路、高速道路、都市モノレールなどの交通網の充実により都市軸への各種機能の集積や住宅開発の郊外化の進行等により、本市の都市構造は、本州から福岡方向の東西軸と小倉から大分方面、黒崎から直方方面の 2 本の南北軸を持つ 型の都市構造へ移行し、この都市軸が交差する小倉、黒崎では、交通結節機能や拠点性が高まるようになった。

1988 年（昭和 63 年）北九州市はものづくりのまちの特性を活かしながら、産業・都市構造の転換を目指す北九州市ルネッサンス構想を策定し、小倉・黒崎を各々本市の都心・副都心として位置づけ、4 大プロジェクト（北九州空港、北九州学術研究都市、響灘大水深港湾、東九州自動車道）を中心に、経済の活性化、交通・物流基盤の整備、知的基盤の整備、都心・副都心機能の充実、地域の核づくりなどを行うことで、少子・高齢化、環境、教育、国際化などの分野における発展のための多様なまちづくりを推進してきた。

北九州市は、小倉城や関門海峡を舞台とした歴史、近代工業発祥の地としての産業の集積、九州の玄関口としての「地の利」などを活かして都市の骨格が形成され、これらに加えて、北九州空港などの交通物流拠点整備、門司港レトロなどの観光・文化資源のストック、高度な医療体制、高い教育水準など、多様な都市資源が蓄積しており、最近では、エコタウン事業や国際的な環境活動に代表される環境への幅広い取り組みなど、国内はもとより、他の国からも注目を集める多彩な顔を持つ都市となっている。

北九州市の位置



福岡県



小倉地区



人口：約 98.8 万人(平成 19 年 9 月現在)
 面積：487.66km²
 位置：東経 130 度 52 分 30.7 秒
 北緯 33 度 53 分 0.2 秒
 広ぼう：東西 32.5km 南北 33.5km

【北九州市ルネッサンス構想・まちづくりの方向】



(2) 北九州市を取り巻く現状とコンパクトなまちづくりの必要性

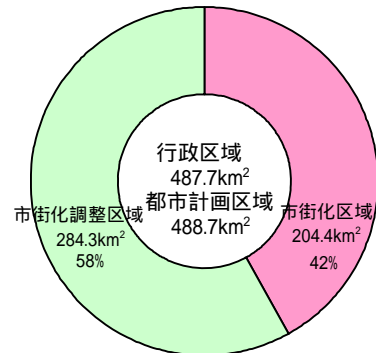
1) 北九州市を取り巻く現状

土地利用

北九州市の行政区域面積は、昭和38年の新市発足当時の約452.2km²から、行政界の変更や公有水面の埋め立てにより、現在487.7km²に拡大しており、県土の約10%を占めている。

行政区域の全域が都市計画区域であるが、森林・水面・自然地が行政区域の49.5%を占め、可住地は行政区域の半分に過ぎず、市街化区域は約204.4km²（市域面積の約42%）となっている。

土地利用計画区域面積



都市計画区域は、行政区域のうち島嶼部を除き公有水面を含む区域

人口と市街地形成の状況

人口は、政令指定都市発足当時の約103.3万人から、昭和54年には約106.8万人となったが、その後減少傾向が続き、平成19年9月現在、約98.8万人となっており、政令指定都市では数少ない人口減少都市であり、さらに、急速に高齢化率が上昇している。

国全体が人口減少にある中、北九州市においても今後さらなる人口減少と、高齢化の進行が予測される。

市街地の状況については、人口集中地区（DID）の状況を見ると、DID面積は平成17年（約156.7km²）までは拡大傾向にあり、昭和40年から平成17年までの40年間で約1.6倍に拡大している。

一方、DID人口は平成7年の約91.7万人をピークに減少傾向にあり、その中で、DID人口密度は年々低下を続け、平成17年現在、約5,670人/km²となっており、40年間で約4割減少するなど、低密度な市街地の拡大が続いてきた。

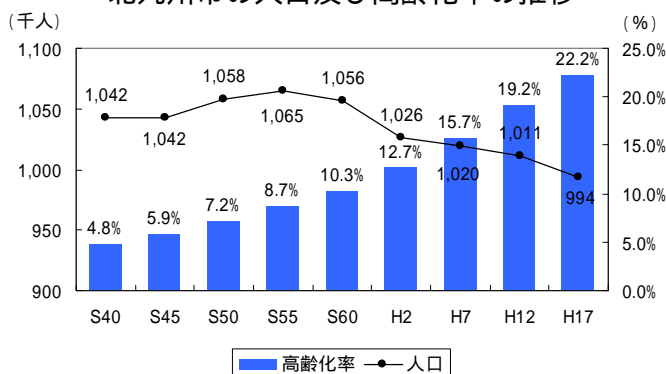
人口集中地区（DID）：原則として人口密度が1平方キロメートル当たり4,000人以上の基本単位区等が市町村の境界内で互いに隣接して、それらの隣接した地域の人口が国勢調査時に5,000人以上を有する地域

人口集中地区（DID）の人口密度

	DID 面積 (km ²)	DID 人口	人口密度 (人/km ²)
昭和40年	98.1	891,031	9082.9
昭和50年	130.8	891,708	6817.3
昭和60年	144.0	905,778	6290.1
平成7年	154.4	916,641	5936.8
平成17年	156.7	888,161	5667.9

（資料：国勢調査による独自集計）

北九州市の人口及び高齢化率の推移



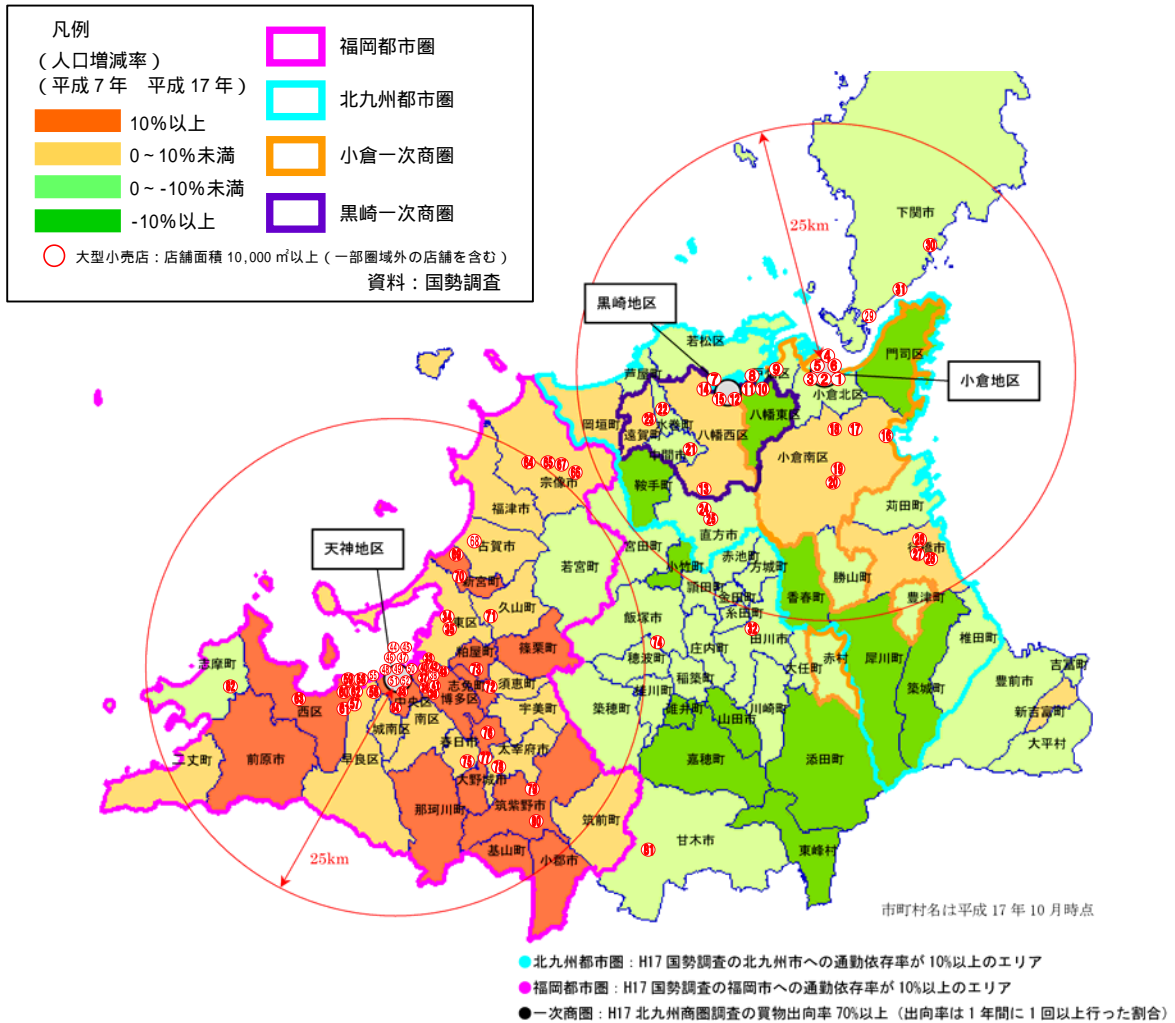
（資料：国勢調査）

福岡都市圏との関係

北九州都市圏では、小倉・黒崎を中心に大型商業施設の一定の集積があり、都市圏の東部を中心に「小倉1次商圈」、西部を中心に「黒崎1次商圈」が形成され、都市圏東西の2大商業核を形成している。しかしながら、鹿児島本線沿いの東西の都市軸、国道10号、国道200号沿いの2本の南北軸に大型商業施設が近年集積しており、比較的分散している状況が見られる。

一方、福岡都市圏では、国道3号と202号沿いにT型の都市軸が形成され、その都市軸が交差する天神・博多駅付近に極めて多くの大型商業施設が集積している状況である。このため、従来、距離的優位性から黒崎地区に向かっていた黒崎1次商圈の隣接市町の宗像市や岡垣町等の消費者が、福岡都市圏の商業集積による吸引力や交通手段の発達・多様化と相まって、天神地区等に足を向けることが多くなっている。

広域都市圏図



(3) 中心市街地の位置づけ

都市構造の形成状況

北九州市の市街地は、昭和 38 年に、九州北部の隣り合う門司、小倉、若松、八幡、戸畑の五市の対等合併により、政令指定都市（北九州市）が誕生した。そのとき既に海側の平野部は市街化しており、高度成長期には小倉南と八幡西の 2 方向の内陸部に市街化が進んだ。その結果、型の市街地構造が形成され、東西軸と二つの南北軸が接続し、鉄道・バス等の交通結節機能を有する小倉と黒崎に都市機能の集積が高まっていった。

また、商業集積の面でも、小倉・黒崎の 2 地区は、他の中心市街地が周辺の比較的小規模な商圏からなる地域の拠点としての機能を担ってきたのと異なり、市域を越えた広域的な商圏が早くから形成されるなど、古くから北九州都市圏における広域拠点として機能している。

都心・副都心を核とした集中型都市への転換（ルネッサンス構想・昭和 63 年）

一方で、北九州市では「均衡ある発展」という考え方が底流をなし、都市機能の集積・強化という視点が、都市政策のなかで十分に追求され得なかったため、昭和 50 年代からの、国際化、高度情報化、広域交通化などを背景とする都市間競争の激化に伴い、相対的な地位の低下が進み、顔の見えない都市となった。このような状況変化を受け、本市では、百万都市にふさわしい都市機能の集積・強化を図る都市政策にシフトするため、昭和 63 年の北九州市ルネッサンス構想において初めて、小倉を「都心」、黒崎を「副都心」として位置づけ、「多核都市」から「均衡に配慮した集中型都市」への転換が示された。

中心市街地の位置づけ（改正中心市街地活性化法を活用した中心核づくり）

北九州市の特性である、豊前・筑前と異なる歴史的な形成過程、五市対等合併による多核的な都市構造、広域拠点としての形成状況などに加えて、都心・副都心（2 大中心核）としての位置づけなどを考慮し、「小倉都心地区」、「黒崎副都心地区」の 2 地区を、改正中心市街地活性化法の仕組みを活用して重点的に取り組む中心核として位置づけ、地域ぐるみで活性化に取り組む。

(4) 今後の中心市街地の活性化の方向性・役割

このように、今後は、北九州市特有の都市構造及び周辺市町村を含めた拠点形成の状況を踏まえ、北九州広域都市圏における東西の2大中心核として、小倉都心、黒崎副都心が、適切な役割分担のもと、独自の地域資源や文化などを活かし、都市機能の集積強化、都心部にふさわしい商業空間や街並みの形成、地域一体による戦略的なマネジメントなど、総合的な取組みを進め、魅力ある拠点形成を図るとともに、その相乗効果を都市圏全体へ波及させていくことが重要である。

以上のことから、今後の中心市街地（小倉、黒崎）の役割として、以下の点を重視して施策展開を図っていくものとする。

小倉都心地区の役割

「北九州広域都市圏の中核として、また北部九州の玄関口として、圏域全体の発展をリードする拠点」

- ・ 広域経済圏における活発な経済活動の中心となる広域交流拠点
- ・ 市民共有の財産・シンボルとして、北九州のアイデンティティを高揚させる場
- ・ 多種多様な都市サービスを、市民はもとより広域からの来街者に提供する場
- ・ 環境首都・北九州市のシンボルとして、人や環境にやさしく、持続可能な都市づくりを先導する場

黒崎副都心地区の役割

「北九州都市圏西部の中核として、広域交通の要衝となり、遠賀・中間地域を含む圏域のものづくり・生活・文化を支える拠点」

- ・ 北九州西部広域圏の生産・消費を支える活動拠点
- ・ 交流・コミュニティの拠点として、地域への愛着や連帯感を醸成させる場
- ・ 多様な生活サービスを含め、誰もが便利で安心して暮らすことのできる居住環境を提供する場
- ・ 地域固有の歴史・自然や伝統・文化などの地域資源を活かしつつ、継承・発展していく場

[2] 中心市街地の現状分析

(1) 中心市街地（小倉都心地区）の概要

北九州市の顔である小倉都心地区は、古くは中心部を流れる紫川河口付近に、九州と大阪を結ぶ乗合貨客船の発着する、九州で2箇所の港の一つである小倉港が存在した。ここから長崎街道をはじめ、九州五街道が始まっており、「九州のすべての道は小倉に通じる」と言われ、古くから海上・陸上交通の要衝である。

また、魚町や馬借、米町など、城下町の仕事をそのまま名前にした町名に見られるように、江戸時代から細川氏、小笠原氏の城下町として発展してきた。

小倉の玄関口であるJR小倉駅は、新幹線並びにJR九州の鹿児島本線と日豊本線の接続駅であり、モノレールも乗り入れるなど九州の拠点駅となっている。

また、駅北口は、AIM・西日本総合展示場・北九州国際会議場・大型シティホテル・商業ビルなどが立地し、国際コンベンションゾーンを形成している。

駅南口においては、百貨店・商店街・オフィス街・歓楽街が広がるなど、小倉駅周辺は九州で有数の商業・業務集積地として、百万都市の顔となっている。

一方、城下町小倉の象徴である小倉城の周辺は、紫川や勝山公園などの自然と、小倉城庭園、文学館、松本清張記念館や九州厚生年金会館、リバーウォーク北九州など、歴史・文化・商業・大学などの多様な施設が充実しており、市民の人気スポットになっている。

また、都心部を南北に流れる紫川は、市のシンボルともいえる川である。紫川マイタウン・マイリバー整備事業では、官民協働による河川整備と周辺市街地のまちづくりが一体的に進められ、都心のオアシスとして市民にとってなくてはならない憩いの水辺となっている。

小倉都心部においては、まちづくり団体、企業及び行政が協働して、春には紫川河畔の桜を活用した「紫川桜まつり」や、公共空間を活用したオープンカフェなど、夏には、県の夏の三大祭りの一つであり、380余年の歴史と伝統を誇る「小倉祇園太鼓」や「わっしょい百万夏祭り」、水辺を中心としたサマーフェスティバルなど、冬には、小倉の風物詩として定着した「小倉イルミネーション」など、四季折々の様々なイベントが行われている。

歴史や文化、水や緑、多様な都心機能が共存する都心地区は、世界の環境首都を目指す北九州市のシンボルとして、「都心の活力と住みよさが調和する文化の薫るまち」へと、さらなる発展が期待されている。

小倉都心のゾーニング

小倉都心地区



(2) 中心市街地(小倉都心地区)に蓄積されている歴史的・文化的資源、景観資源、社会資本や産業資源等の既存ストック状況の分析

歴史的・文化的資源

本州と九州を結ぶ交通の要衝であり、北九州の歴史的・文化的資源が豊富

古来から、小倉周辺は豊前国豊前郡と呼ばれ、歴代の政権から交通の要衝として重視されてきた。1600年、関ヶ原の戦いの後、細川忠興が豊前・中津城に入国、1602年に小倉に居を移し、40万石にふさわしい小倉城の築城や周囲8kmの城郭を持つ上官地の構築が行われた。

また、城下町だった小倉には、常盤橋を起点とする長崎街道が通っていた。長崎街道は、当時鎖国体制の日本で、唯一外国との文化交流や通商の窓口であった長崎から西洋の文化や新しい技術などを日本に伝える文明の道として重要な役割を果たしていた。

本州と九州を結ぶ交通の要衝である小倉では、明治維新を迎えると、廃藩置県にそなえて鎮台(軍隊)が設置され、さらに歩兵第十四連隊の発足が続くなど、次第に軍都の性格を帯びるようになった。

現在の小倉城は、1959年に築造されたもので、隣接地には、江戸時代の大名家敷を再現した書院棟、茶道などが体験できる小倉城庭園があり、小倉城周辺の代表的な観光施設にもなっている。

小倉城



小倉城庭園



北九州市にゆかりのある文学者は多く、中でも小倉については、活躍した2人の女流俳人(杉田久女・橋本多佳子)に加え、明治の文豪・森鷗外、芥川賞作家・松本清張などに代表される文学のまちであり、小倉を題材にした作品が多数残されている。

松本清張記念館



都心部には、松本清張の創作活動や人物像などを紹介する松本清張記念館や、北九州文芸のあゆみと北九州ゆかりの文学者を紹介する北九州市立文学館などがあり、文化都心としての重要な資源となっている。

小倉都心地区には、市内最大の客席数を有するホールを持つ九州厚生年金会館、ものづくりをアピールするとともに、舞台芸術創出の発信拠点となる北九州芸術劇場等、多様な文化施設が集積している。

特に、紫川周辺には数多く文化・教育施設が立地しており、中でもリバーウォーク北九州は、劇場、美術館などの文化施設、放送局、新聞社などの情報発信施設、大学キャンパスなど多様な都市機能が複合集積した、小倉都心のシンボリックな拠点施設となっている。

また、小倉都心の商店街は、日本で初めての公道にかかる全長130メートルのアーケードが架けられ、銀天街発祥の地として有名な魚町銀天街（1951年10月）、また、スーパーマーケットとして日本初の24時間営業を導入した、旦過地区の「丸和」など、先駆的な取り組みを行ってきたまちである。

さらに、小倉都心地区には、海や山の幸に恵まれた北九州市を代表する個性的な食材や名産品が集まり、食を通じたまちの魅力・賑わいづくりが進められている。

例えば、旧小倉市発祥の「焼きうどん」をはじめ、江戸時代からの伝統料理「ぬかみそ炊き」「旦過の屋台」「豊前一粒カキ」「合馬たけのこ」、さらには、研究会が発足し、小倉の新名物づくりが進められる「ロールケーキ」などがあり、古くから食に恵まれた北九州、小倉の食材、食文化を活かした賑わいイベントも行われている。

なかでも、旦過市場は、豊富な食材がそろい、“海の幸”“山の幸”が豊富に並ぶ北九州の台所となっている。

リバーウォーク北九州



北九州芸術劇場



旦過市場



水環境館



銀天街発祥の地モニュメント



景観資源

紫川周辺一体の都市環境（マイタウン・マイリバー整備事業）や勝山公園などの自然・景観が充実

紫川は、小倉都心部を流れる二級河川で、水景都市・北九州市のシンボルともいえる川である。以前は、工場排水や生活排水などによって汚染されていたが、下水道の整備や市民と行政が一体となった浄化運動などによって水質が向上した。政令市の都心を流れる川でありながら、現在ではアユやシロウオが遡上し、上流ではホタルが舞うなど、市民にとってなくてはならない憩いの川となっている。

「紫川マイタウン・マイリバー整備事業」では、官民協働により、河川、公園、道路、市街地の整備が一体的に進められ、架け替えられた新しい橋や、市民に開かれた親水空間など、川に顔を向けた新しいまちが創出されている。また、美しく魅力的なまちなみが形成されたことがきっかけとなり、紫川マイタウンの会など、地元団体を主体として、紫川の水景を舞台に、四季折々のさまざまなイベントが盛んに行われている。

こうした賑わいのある魅力的なまちづくりが行われていることが全国的にも高く評価されおり、平成19年度都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」等を受賞している。

小倉都心内を流れる紫川



紫川マイタウン・マイリバー整備前後の比較

・昭和40年代中頃の紫川



・現在の紫川



太陽の橋（中の橋）



鉄の橋（紫川橋）



水鳥の橋（鷗外橋）



勝山公園は、細川・小笠原両氏の居城であった小倉城を中心とした都心のシンボル公園で、紫川と一体となった都心部の憩いの場として、多くの市民に親しまれている。

勝山公園の大芝生広場周辺では、河川整備として、水上ステージとしても活用できる「浮き桟橋」、カヌーなどが置ける「艇庫」、水辺を散策できる石張りの「河畔遊歩道」も完成しており、都心部の「オアシス空間」であるとともに、賑わいづくりの空間としても、さらなる活用が期待されている。

オープンスペースを活用した賑わいづくりイベント



紫川と一体となった勝山公園



社会資本や産業資源

中枢的な都市機能の集積や交通ネットワークが充実

小倉都心地区は、紫川周辺や小倉駅周辺を中心としたこれまでの取組みにより、都市基盤の整備は一定の進展が図られており、商業・業務、コンベンション、医療・福祉、行政機能など、中枢的な都市機能が集積している。

交通面では、鉄道、バス、モノレールなどの公共交通が発展し、北九州市の玄関口として機能するJR小倉駅は新幹線、JR鹿児島本線、日豊本線の接続駅であり、モノレール直結するなど、広域交通の結節点としての機能を担っている。

また、駅北口は、AIM・西日本総合展示場・北九州国際会議場・大型シティホテル・商業ビルなどが立地し、歩行者用デッキで接続されるなど、国際コンベンションゾーンを形成している。

駅南口においては、百貨店・商店街・オフィス街・歓楽街が広がるなど、小倉駅周辺は九州で有数の商業・業務集積地として、百万都市の顔となっている。

西日本総合展示場



小倉駅北口ペDESTリアンデッキ



交通ネットワーク



北九州モノレール



小倉駅南口ペDESTリアンデッキ



人的資源

タウンマネジメント組織（TMO、北九州まちづくり応援団(株)）や地元の多様なまちづくり活動団体等の存在

小倉都心地区は、平成 17 年度にタウンマネジメント機関として、北九州商工会議所が北九州TMOを発足し、さらにTMO構想（小倉版）に基づくタウンマネジメント推進事業の実行組織として、地元企業等の出資により北九州まちづくり応援団(株)が設立され、具体的な取組みがスタートするなど、民間事業者が主体となった仕組みづくり等において成果が見られている。

また、地元の多様なまちづくり団体等として、「紫川マイタウンの会」「小倉中央商業連合会」「魚町商店街振興組合」等の組織が、各種イベント等の実施を行っており、多くのまちづくりの担い手が活躍している。

水面を活用したイベント（紫川）

